



Title	孟子
Author(s)	木村, 栄一
Citation	懷徳. 1958, 29, p. 1-14
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90323
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

孟子

木村 英 一

懷德堂の古典講座に於いて、私は毎年經書を一つづつ取り上げてお話をして來ました。今年は孟子の順番に當つております。

孟子については皆様はもうよく御存じで、今さら通り一遍の御紹介を申し上げるまでもないでせうが、ざりとてここで部分的な細かい研究を發表しましても、御興味のない方も多く、御迷惑であらうかと思ひます。それでやはり今日は、思ひ出していただく意味で、御存じのことばかりを二三簡単に申し上げますが、ただそこへ、多少私の勝手な解釋を入れて、感想をのべてみたいと考へます。もしこの話が、久し振りに孟子を味はつていただく機縁にでもなれば、望外の幸ひであります。

御承知の様に、孟子は孔子より約一〇〇年程後の人である、何年に生れて何年に死んだのか、詳しいことはわかりませんが、戰國時代の中頃、即ち紀元前四世紀の人であることに疑ひはありませんから、今から二三〇〇年ほど前の人であります。生れた土地は鄒國、即ち今の山東省鄒平縣で、孔子の故郷である魯、即ち今の曲阜に極近い南方であります——直線距離ならば三〇キロに足らぬでせう——。名を軻と言ひ、孔子の孫の子思について學問を受けたとも、また子思の弟子に就いたとも言はれてゐます。——年代から言へば、おそらく子思の弟子に就いたのでせう——。當時の學界には、孔子の始めた儒學の外に、いろいろ立場を異にする學問があつて、劇しい論争が行はれておりました。孟子はその間に在つて儒學を雙肩に擔つて立ち、萬丈の氣餒を吐きました。

若い時に、どの様にして生ひ立ち、どの様にして勉強したかは、よくわかりませんが、有名な物語りとしては、御存じの孟母三遷の教へとか、斷機の教へとかが傳はつてゐる、——孟子の母はたいそう賢い人で、子供の教育に熱心であり、環境のよい住居を求めて三度も宿がへをしました。最初は墓地の近くであつたのが、市場の近くへ、更に學校の近くへと移りました。また、或る時孟子は學問を習ひに行き、あまり身が入らずに、怠けて歸つて來ますと、母は恰度機を織つてゐましたが、せつかく織り進んでゐる機絲をぶつ、つり、切つて見せて、何事でも途中でやめればこの様なものだと思はせました。この様な母の薰陶を受けて學問にはげみ、終に立派な人になつたと言ふのです。これは漢代の列女傳といふ本に出てゐます。また孟子の新婚の頃でせうか、妻が私室でしどけない姿をしてゐるのを見て怒つたところ、母に、「それはお前も悪い、部屋に入る時には聲をかけて入るだけの思ひやりがあるのが禮義といふものだ」とたしなめられた話とか、後に抱負をもつて齊に仕へましたが、不幸齊王と意見が合はず、結局齊を去らねばならなくなつて悲觀しておりましたのを、母にはげまされて終に出處進退を誤らなかつた話、等が韓詩外傳や列女傳に載つてゐます。しかしこれ等は皆漢代になつて出來た書物に見える物語りで、眞偽の程はよくわかりません。それではこの外、確實な事蹟としてわかつてゐることは何かと言へば、それは『孟子』の書物に載つてゐる事から——梁・齊・宋・薛・滕・魯等の國々をめぐり歩いて、處々に足を止め、王様をはじめその國々の人々に道を説いて抱負を實行しようとしたこと、またその間に多くの學者と問答したり、弟子共の質問に應對したりしたこと等——だけであります。おそらくこれは、中年以後の十數年間の事蹟でせう。そしてこれ等の記事からもわかることですが、史記列傳の記載によれば、結局どこへ行つても眞に理解してくれる人もなく、志を得ませんでした。そこで晩年には故郷の鄒へ歸つて弟子の教育に従事し、兼ねて弟子萬章の徒と共に、「詩書を序し、仲尼の意を述べて」、つまり自分の打込んで來た儒學の研究を整理し、實現し得なかつた抱負を學術の上に傳へて——この孟子七篇を作つた、といふのであります。

それでは、孟子の本領は一たいどこに在り、どこに偉いところがあるものでせうか。今のべました簡単な傳記で見ますと、彼は結局志を得ないで、不遇の中で死んでゐます——その點は孔子も同じですが——。すると賢明さうに見えても、要するに彼は出世の道では失敗者なのですから、——失敗した以上はやはり愚なところがあつたに相違ない、といふ見方をしますならば——、結局彼には何等貴ぶべき點も、手本とすべきところも無ささうである、しかし不思議なことには、彼の思想や態度は、後世に對して非常に大きな影響を興へ、幾千年の後までも多くの人々の共感と尊重とを得てゐますが、これは一たいどういふことなのでせうか。思ふに人間の生活は、人類發生以來何萬年何十萬年に互つてつづいており、そこには他の動物とは違つた人間特有の本性といふものが、終始變らず一貫してある筈ですが、それと同時に、個人個人の生きてゐるそれぞれの時代には、それぞれの特殊事情があつて、その意味では、人間の生活狀態なり生活條件なりは、常に變化してあります。してみると、孟子が生存中の何十年間に於いて、終に世間に理解されないで志を得なかつたといふことは、彼が小賢しくなかつた爲には相違ないとしても、實際眞に賢明でなかつた爲めなのか、それともその時代の特殊事情によるものなのかは、それだけでは容易に決定出来ません。しかし歿後何百年何千年に互つて、種々の時代の事情の相違を越えて、いつまでも人を動かす力をもつてゐるといふことは、そこに何か人間そのものの本質に關する、永遠の眞理に觸れるものがある爲めだと言はねばなりません。そして、それが孟子の本領であるに相違ありません。思ふに孟子は、人間の眞の在り方、といふ永遠の眞理を究明して、これを實現しようとしてしました。そして、當時の特殊事情に阻まれて志を得ないに關らず、なほこの眞理の究明と實現とに挺身しつづけることによつて、終にこれに殉じたのでありますが、眞理に殉じるといふことは、言ひ換へれば最も眞實に生きることである、この眞實な生き方こそは、何時までも人間の心に訴へる力をもつてゐる所以でせう。それでは、孟子が追求して止まなかつたところの、「人間の本质に關する永遠の眞理」とは、一たい何かと申しますと、それは——彼の行爲や主張を見ればすぐわかりますが、——結局道德である。従つて彼がそれに向つて眞實に生きた

生き方とは、道德主義の生活態度であります。ところで道德主義の生活態度といふことになりますと、孟子の前には實にすばらしい手本がありました。それは言ふまでもなく孔子でありまして、僅か百年前に、つい近くの魯國から出て、實に立派に道德主義を實行して見せております。孟子はこの手本に甚く傾倒しまして、結局生涯をかけてその跡を追ふ結果になつたのであります。ですから彼の孔子に對する尊敬には、まことにただならぬものがありました。例へば公孫丑上篇には、伯夷や伊尹と並べて孔子を評論し、

……道を同じくせず、……皆古の聖人なり、吾いまだ行ふあること能はず、しかれども願ふところは則ち孔子を學ばん（ことなり）、

と言ひ、その理由としては、實は孔子が一番傑出してゐることをのべて、「生民有りてより以來、未だ孔子あらざるなり」とたたへてゐます。そして、どの様に孔子が傑出してゐたかを示す爲めに、宰我・子貢・有若等の言葉を引いて、感激的な語調でこの文を結んでゐます。

宰我・子貢・有若、智足以知聖人、汙不至阿其所好、宰我曰、「以予觀於夫子、賢於堯舜遠矣、」子貢曰、「見其禮、而知其政、聞其樂、而知其德、由百世之後、等百世之王、莫之能違也、自生民以來、未有夫子也、」有若曰、「豈惟民哉、麒麟之於走獸、鳳凰之於飛鳥、泰山之於丘垤、河海之於行潦、類也、聖人之於民、亦類也、出於其類、拔乎其萃、自生民以來、未有盛於孔子也、」

なほこの外にも、孔子に敬服してゐる意味の言葉ならば、幾つも拾ふことが出来ます。一たい孟子は、なかなか聰明な、しかも鼻つ柱の強い人で、見識は高いし、批判は鋭いし、容易に人に屈する様な人物ではありません。ところが孔子にだけは無條件に頭を下げてゐます。どうしてかういふ心境に到達したのか、その経路はよくわかりませんが、ともかくこの剛氣なうるさ形をここまで頭を下げさせたといふことだけを見ても、孔子の人格の程が想見されます。そしてそれと同時に、孔子や孟子の歩いた道が、生存當時に於いては種々の批判があつたに關らず、後世になるにつ

れてますます價値を發揮して、永く人々を導く大道となつてゐる事實から見て、その道德主義なるものが、何か人間の本质に強く觸れる眞理を藏することを感じるのであります。そこで私は今、孟子の道、即ちその道德主義が、どういう意味で人間の本质に觸れてゐるのかといふことと、孟子の道德主義が、何故當時に理解されなかつたかといふことと、この二點について、少しく考へてみたいと思ひます。

一たい「道德」とは何かといふことは、まことに重大な問題であつて、とうてい簡單には片づけられません、假りに一口で言へば、「人間の最も正常で合理的な生活態度のルール」であるとも言へませう。すべて我々が物體或は物質を取り扱ふ場合には、充分に經驗を積み實驗を重ねてその性質を知悉した上で、合理的に處理するのが一番よろしい。いはゆる科學的操作がそれです。ところが人間を取り扱ふ場合——我々が、自分自身とか、他人とか、社會全體とかに對する場合の態度——は、どうすれば一番よいかと言へば、道德的に處理するがよい、道德の合目的性は一種の合理性であつて、従つて人間關係の最も正常で合理的なルールは道德であります。もつとも我々人間は、他の動物より勝れた知性をもつと共に、人間らしい感情と意志とをもつており、知・情・意を兼ね備へております。してみると、そのうちの知は合理的なものでせうが、感情や意志は、必ずしも合理的には動きませんから、この意味では、知的に合理的であることだけが人間の正常な在り方ではない、といふことになりませう。勿論それはその通りですが、しかし實際は、知・情・意の三者は分離して存在するのではなく、互に入り雜つて働き合つてゐます。そして我々が多くの經驗を積み、深く考へて事を行ふやうになればなる程、次第に知・情・意が調和して、三者が互に矛盾しない——合目的に合理的な——態度をとる様になるのが自然の成り行きです。この様な態度の極致が人間の正常性の基準であり、そこに見られるルールが道德だといふのです。ですから、例へば一時の感情に激して大きな損害を蒙つたり、私利私欲に驅られて社會生活を破つたりするのは、要するに人間の眞の欲求に矛盾した不合理な行爲で、道德に反するものであり、人間の正常な在り方ではありません。この様な矛盾をなくすることこそ道德に合するもので、正

常性の獲得です。かくてこの意味では、道徳とは、人間の社會生活に於いて、あらゆる欲求を最も正常に調和させて、すべてを合理的に遂行させる爲めのルールであると言つてよろしいでせう。ですからその意味では、自覺した人間にとつては、道徳は人間の最も無理のない自然な在り方を示すもので、決して自己を外から強制する様な窮屈なものではありません。全く自由意志に基く最も望ましい自然な道です。このことを孟子は實に明確に喝破してゐます。

仁は人の安宅なり、義は人の正路なり、安宅を曠しくして居らず、正路を捨てて由らず、哀しい哉（離婁上）

「仁ほど住み易い家はない、義ほど歩き易い路はない……」、人情の自然に従ふことが道徳である、道徳に外れた行爲は、一見安易に見えても、どこかに無理があつて不自然である、——孟子の有名な性善説は、結局このことを言つたものに外なりません。勿論、人間は誰でも、完成された仁・義・禮・知の四徳を、最初から備へてゐるのではない、そんな老成したものとして生れて來るのではなく、幼い未熟な生命として生れて來るのですが、それが踏みじられ、自然にのびて行く方向は、仁・義・禮・知といふ完成された四徳へと向ひます。この四つの芽を四端と言ひ、惻隱・羞惡・辭讓・是非を數へますが、これが孟子の性善説です。こんなわけで、善への志向性は全く人間性の自然な傾向で、従つて道徳は、全く人間の自由意志の上に立つ自發的・自律的なもの、といふことになりましたが、これは深く道徳の眞相を衝いてゐると思ひます。次の言葉の如きも、その端的な表現です。

魚は我が欲する所なり、熊掌も亦我が欲する所なり、二者兼ねるを得べからずんば、魚を捨てて熊掌を取る者なり、生も亦我が欲する所なり、義も亦我が欲する所なり、二者兼ねるを得べからずんば、生を捨てて義を取る者なり。生も亦我が欲する所、欲する所生より甚しき者あり、故に苟も得ることを爲さざるなり。死も亦我が惡む所、惡むところ死より甚しき者あり、故に患も避けざる所あり……（告子上）

これはまことに爽やかな言葉です。尤も至極で何の奇もない説ですが、しかし道徳の本質をここまで爽やかに言つてのけて些のためらひもないところに、やはり修養を積んだ剛健な氣象を感じさせます。

もつともこの様な考へ方に對して、すぐ疑問が起ります。先づ第一に、人間性を單に善なるものと見ることは、あまりに樂天的な理想主義で、甘い考へ方ではなからうか、といふ疑問です。思ふに人間が眞・善・美を理想とするものである限りは、人間性の一面に善を欲する性質があることは否定出来ませんが、しかし普通には、善いことよりも面白いこと、樂なことを欲するといふこともあつて、なかなか道徳的になれないのが現状です。またキリスト教では人間の原罪を認めてゐますし、眞宗では、人間は罪惡の深い凡夫だとしてゐる、いづれも非常に深い人間性の自覺です。中國でも夙に孟子の直後に、異見を唱へた人がありました。それは御存じの様に、孟子より數十年後に現れた荀子で、性惡説を唱へて、孟子に眞つ向から反對してゐます。なるほど人間の現實は常に不完全であつて、むしろ惡と言つてよいことは荀子の言ふ通りですが、しかしいくら現實は惡でも、常に善を理想としてもつ存在であること、そして最も正常で自然な生活の標準である道徳は、この善を理想とする性質に基いて成り立つことは、孟子の言ふ通りでせう。ですから孟子の説は、どこまでも理想に對する志向性を説いたものと解すべきであつて、現状を説いたものとして誤解すると、あまりに甘い樂天主義だといふことになります。しかし現状が善くないが故にこそ、我々はより善くなりたいといふ切なる要求をもつのであつて、この要求に基いて我々のあるべき姿を的確に指示した點に於いて、孟子の説は永遠に眞實であり、人間そのものの本質の一面に觸れたものと言へませう。——荀子の性惡説は、人間は現實に於いては常に不完全さを脱しないのですから、凡そ現實性を論じる限りでは永遠の眞相に觸れてゐますが、正常な生活の基準としての道徳の自律性は、あれでは充分明かにはなりません——。そして道徳的態度は人間の正常で自然な姿であるにしても、現實は常にそれと相反する不完全なものである限りは、當然人間にはきびしい修養が要求されるのであつて、その意味では、孟子の説は甘いなどとは到底言へますまい。

なほここで、「永遠に眞實である」とか、「眞理である」とかいふことの意味を、一言辨じておき度いと思ひます。「人間である以上は、當然誰でも善を欲する」、といふことが、孟子の道徳主義の基礎であり、そしてそこに永遠に

人間の眞實に觸れるものと申しましたが、果してさうだらうか、といふ疑問がやはり起ります。前にも觸れた様に、例へば普通の人間の有りのままの氣持を申せば、きびしい道徳的な修行をするのは善いことではあらうが、そんな苦勞をするよりも氣ままに面白くやり度い、怠けて安易に暮したい、といふのが、十人中九人までのいつわらぬ氣持ではないでせうか。それならばむしろその方が眞實であり眞理ではないか、といふことになります。しかしそれは現狀ではあつても、こゝで言ふ意味での眞實や眞理ではありません。先年アインシュタインが有名な二度目の學説を發表しました時、——私の仄聞してゐますところでは、たしかアインシュタインは二十五歳の時と五十歳の時と、二度有名な學説を發表しました——、新聞記者が彼のところへ行つて、「先生の今度の論文は、世界中の學界に非常なセンセーションを捲き起してゐます」と言ひました。する彼はけげんな顔をして、「僕があゝの證明に使つた高等數學は、世界中の學者でわかつてくれる人は十人とは居らぬ筈だ。それにセンセーションを起すとは思ひだ」といふかりました。すべて眞理とか眞實とか言ふものは、誰にでも簡単にわかるが故に眞理であり眞實であるのではない、極端なことを言へば、誰もわかつてくれず、一人も賛成者が得られなくても、正しいことは正しいのです。それでは眞理とか眞實とかいふのは、一たい何を指すのかと言へば、もし人が深く考へて行けば、人間である以上は誰が考へてもさうなるより仕方がない、——實際は多くの人はそんなに深く考へませんから理解しないでせうが、もし深く考へるならば、誰が考へてもさうなる——といふ様なものが、眞理であり眞實であるのです。ですから、わかり易いことだけを上手に説いて、うまくジャーナリズムに乗つて大衆の賛同を得たものが、必ずしも眞理ではないのです。——俳優などは人氣商賣ですから、人氣を氣にするのは已むを得ませんが、しかし一時的に人氣の出たスターが、必ずしも立派な藝術家ではないのと同じです——。孔子や孟子が當世に理解されず、不遇に一生を終つたことは、必ずしも彼等の説が誤りであつたことを示してはおりません。そして歿後何百年何千年を経てあらゆる事情が變化したに關らず、常に深く物を考へる人によつて正しいと認められて、後世に大きな影響を與へてゐますことこそ、それが人

間の眞實に觸れる眞理を含んでゐることを、雄辯に物語るものではないでせうか。

それでは孟子は、何故在世中では不遇であつたのでせうか。どういふ特殊事情があつて皆にわかつてもらへなかつたのでせうか。このことを知る爲めには、當時の事情を一考せねばなりません。當時の中國はいはゆる戰國時代で、多くの國々が相對立して覇を爭つてゐました。その意味では恰も大戰前のヨーロッパ列強の様なものであり、また規模が大きくなりますが、今の世界をお考へ下さつても結構です。かういふ状態の下では、どの國も、また誰でも、自分の利益を中心に考へて行動することになり勝ちで、武力と經濟力との優位を競ふことになります。ですから當時の國々の目標は「富國強兵」です。恰度孟子の當時、西方の秦國に商鞅といふ有能な政治家が outcome して、きびしい法治政治によつて徹底的な富國強兵策を行ひ、四方の國々に脅威を與へました。それに對して諸國も、多かれ少なかれ、富國強兵へと動いてゐます。ところが孟子は道德主義を振りかざして、眞つ向からこれに反對したのです。道德の立場から見れば、支配者の利益の爲めに多くの人民を苦しめるのは悪いことであり、戰爭などは勿論いけません。しかしこれでは孟子は、當時の君主や政治家達の氣風に反對ばかりしてゐたのでありまして、用ゐられなかつたのは當然でせう。御存じの様に、孟子の開卷第一に、梁の恵王に會つた時の問答があります。王は先ず、

叟、千里を遠しとせずして來る。また將に以て吾が國を利せんとするかと尋ねますと、孟子はこれに答へて、

王、何ぞ必ずしも利と曰はん、また仁義あるのみ、王は何を以て吾が國を利せんと曰ひ、大夫は何を以て吾が家を利せんと曰ひ、士庶人は何を以て吾が身を利せんと曰はば、上下こもごも利をとりて國危し、……と喝破しました。凡そかういふ調子です。

もつとも當時、孟子の外にも、この天下の状態を心配して、これを救はうとした學者がいろいろありましたが、彼等の考へ方や方は、たいてい孟子と大分ちがひます。そこで孟子はそれ等の中の有力な説にも強く反對してゐます。

例へば墨子は、孔子の「仁」とよく似た「兼愛」——すべての人を平等に愛すること——を説き、利他心を以て人間の本性だとしました。戦争否定の説を唱へ、天下の苦しんでゐる人民を救ふ爲めに身を粉にして働くといふ風で、當時彼の學徒は非常に盛んなものがありました。しかし彼の説には、天下を救ふ爲めとは言へ、あまりにきびしい勤勞と節約とを要求して、文化を低下させて生活をあじきなくするもので、人情の自然に副はぬところがありました。またその立場が實用主義——その意味で一種の功利主義——に傾いており、結局孔子や孟子とは餘程違ひます。また楊朱は墨子とは正反對の立場で、徹底した利己主義を主張しました。人間の本性は結局のところ利己心である。だから萬人は各自正直に自分だけのことを考へるがよい、さうすれば社會狀態などは自然に落着くところへ落着く、それがむしろ眞の道である、といふのです。これも當時に於いて多くの共鳴者を得て有力でありましたが、孟子はこれ等の説に對して、口を極めて反對してゐます。また當時、中國唯一の自然哲學である陰陽五行の學が勃興してゐます。これは今日の思想界で言へば自然科学的世界觀の様な地位を占める學問で、自然界も社會も、陰と陽、及び水・火・木・金・土の五つの原素から構成されてゐると見て、それによつてすべての現象を合理的に説明しようとしてゐました。即ち孟子よりやや後れて、齊に騶衍といふ學者がりましたが、彼は陰陽五行の原理によつて黃帝以來の歴史——人類の始から當時までの歴史——を合理的に説明し、また中國全土の九州に基いて類推して、全天下はその八十一倍の大九州から成る、といふ説を立てました。これは今日から見れば迷信と空想との塊にすぎませんが、當時の人々には、極めて實證的で合理的な、進歩した學說と思はれたでせう。彼がこの説をまことしやかに説いてまわりますと、天下に非常なセンセーションを捲き起し、梁の惠王は彼を賓客として優遇しましたし、趙の平原君や燕の昭王は、弟子の禮を執つたと言はれてゐます。史記は彼の人氣がたいしたものであつたことをのべた後、これを孟子が不遇であつたことと比較して、次の様な評論を加へております。

……その諸侯に遊びて魯禮せられしこと此の如し。豈仲尼の陳・蔡に菜色あり、孟軻の齊・梁に困しむしと同

じからむや。故に武王は仁義を以て紂を伐ちて王となり、伯夷は餓えて周の粟を食はず、衛の靈公陳を問ひしも孔子は答へず、梁の惠王謀りて趙を攻めんと欲せしも、孟軻は大王の邪を去りしを稱したる、これ豈世俗に阿りて苟合するのみなるに意有らんや、方柄しかくのほぞを持して圓鑿まるきぎに内れんと欲す、それよく入らんや、……（史記孟荀列傳）

つまり孟子は、自分の信念を枉まげず、世俗に迎合しなかつた爲めに、世に用ゐられなかつたのだ、といふのです。なるほどこれでは、孟子の説が如何に正しくても、當時に理解されなかつたのは當然でせう。

以上申しのべましたところによつて、孟子の道德主義が、當時には理解されなかつた、しかしそれにも關らず、永久に人間性の眞實に觸れる正しいものをもつてゐる、といふことを簡単に考察しました。ところで現代は、先程から申します様に、孟の在世當時と或る意味でよく似てゐまして、多くの國々が利益をもとめて力を競つており、一般の風氣も、何事によらずそれぞれ自己の立場を強く主張して對立してゐます。そこで、果して孟子の説が永遠の眞理に觸れてゐるとすれば、それがこの現代に於いて、我々に對して何を教へ何を示唆してゐるだらうか、——このことを最後にちよつと考へてみたいと思ひます。御存じの様に、近代ヨーロッパに産業革命が起りました以來、現代へかけて、機械文明が非常に發達しまして、我々の生活は便利になり、生活水準が高まつて來ました。しかしそれだけに、有力な機械力を自由に利用して思ひ思ひに競争することから起る對立は、ますます劇しくなるばかりです。そして果ては、人間が機械を利用することの爲めに、かへつて人間が追ひまはされ踏みじられて、破滅しようと思はしてゐます。——そこに大きな矛盾があります。——早い話がここに一臺の優秀な機械が作られて、今まで一〇〇人かかつてした仕事が一人で出来る様になつたとしますと、九十九人は失業者になつて失業問題が起つて來ます。また機械力による大量生産が行はれると、資材や原料が澤山要るので資源の獲得競争が起り、一方、製品をどんどんさばかねばなりませんから、販路擴大の爲めの食ふか食はれるかの競争が起る——これはほんの一面だけを見たに過ぎませんが、事實はもつと複雑深刻です——、かういふことが國際的規模に於いて行はれた爲めに、嘗てのヨーロッパ先進資本主

義諸國の間に起つた植民地獲得競争、帝國主義戦争となつたのであり、はては第一次世界大戰の様な破局を將來しました。今ではますます進んで、第二の産業革命と言はれる原子力利用の途が開けつつあり、爲めに、一度戦争にでもなれば、人類が全滅するのではないかと心配されてゐる、つまりこれは、人間が機械を利用するところまでは人間が主人ですが、その機械の爲めにかへつて人間が追ひまはされて破滅に瀕してゐるとなると、もはや機械の方が人間の主人です。そこで、これではならぬといふので考へ出されたのが社會主義です。これは、強力な政治統制によつて、眞に國家目的・社會目的に副ふことだけに向つて、重點的に機械文明を使はうといふのですから、なる程その意味では、機械を亂用して逆に人間が苦しめられるのとは違つて、人間の方が機械を使ふことになります。そして有力な機械を一定の目的の爲めに重點的に使ふのですから、當然その意味ではすばらしい能率があがります。しかしここで考へねばならぬことは、政治といふこともやはり技術であることです。機械文明も、人間が幸福な生活を築く爲めの有力な技術ですが、政治も亦、人間が幸福な生活をする爲めに、國家社會を秩序づけて運営する技術である、技術は手段であつて、それ自體が人生の目的でないことは、機械も政治も同じです。強力な政治統制技術を發見して、それによつて支配權を機械から人間の手へ取りもどしたまではよろしい。ところが今度は政治統制といふ強力な技術の爲めに、人間の自由がふみにじられる患ひがある。ソビエットや中共の生活にどれ程の自由があるかとやかましく議論されるのはその爲めです。人間の社會が、自由な人間性を失つた蟻や蜂の様な——ただ營々と働くだけの——社會になつたならば、たとひ生理的には生き長らへても、實質的にはもう人間ではなくなるでせう。

要するに機械文明も社會主義體制も、人間が自然界や社會を處理する爲めの強力な技術であり、手段である、しかしこれ等はいづれも極めて有力な手段であるだけに、それを使ふ人間が餘程しつかりしないと、使ひ切れなくなつて逆に使はれてしまひます。そして今や、逆に人間が使はれたが最後、人間自身が破滅してしまふ程に有力な手段となつてゐるのです。それではこの事實にどう對處すればよいのでせうか。思ふに人間が充分にしつかりして、それ等を

使ふべき時にのみ使ふ、使ふべからざるところへは絶対に使はない、といふ様になればよいわけですが、その場合、使ふべき時か否かを決める標準は何かと言へば、それはやはり道德の外にはないでせう。少くとも嘗て孟子が孔子の偉大さをたたへて、

……以て速かにすべくして速かにし、以て久しくすべくして久しくし、以て處るべくして處り、以て仕ふべくして仕ふるは、孔子なり、……孔子は聖の時なる者なり、（萬章下）

と言つた意味での時であり、それは眞の道德的行爲が時宜に合することを言つたものに外なりません。思ふに道德は、完全な自由意志の上に立つ自發的行爲であつて、而も時宜に適し、かつ萬人に普遍妥當的な行爲ですから、何びとでも自覺が深まれば當然自發的に道德に従ふこととなりますし、また若し萬人が自覺して道德に従つたならば、人間の自律性は完全に保持されて、眞に矛盾のない世界を建立することが出来る理です。ですからさし當り、自由主義でも社會主義でも、或は兩者の長所を折衷した第三の社會でも、何でもよろしいが、それ等の社會の道德的レベルが充分に高まつた時にのみ、人類は破滅の危險から免れることが出来るでせう。そしてその爲めには、例へば孟子の様に、一生を犠牲にしてもかまはぬから道德主義で行かう、といふ強い人が多くなり、大衆も良識をもつて、不道德なことにはついて行かなくなればよいわけです。もとよりそれは大層むづかしいことで、とうてい一朝一夕には實現出来ませんが、しかしこの様な原則的な意味に於いて、道德的な眞理は、現代に於いてもますます痛切に感ぜられます。

仁人之安宅也、義人之正路也、曠安宅弗居、舍正路而不由、哀哉（離婁上）

といふ孟子のなげきは、そのまま現代にも當てはまるのであつて、孟子は山東の墓の中から、現代に向つて、今も絶叫しつづけてゐると言つてもよいでせう。

孟子の書物には幾多の名言があつて、皆様の中にも愛誦しておられる方も少くないと思ひます。今、手にまかせて一、二引きぬいてみますと、

……有_リ大人者、正_レ己而物正者也（盡心上）

といふ言葉がありますが、まことに大人の一事をゆるがせにしない正大な姿を示してゐます。また彼の有名な大丈夫の態度、

居_リ天下之廣居、立_ニ天下之正位、行_ニ天下之大道、得_レ志、與_レ民由_レ之、不_レ得_レ志、獨_リ行_ニ其道、富貴不_レ能_ヘ淫_、貧賤不_レ能_ヘ移_、威武不_レ能_ヘ屈_、此之謂_ニ大丈夫_一、

といふ剛健無比な人格の理想は、今なほ我々の生き方に大きな示唆を與へるものとして、千古の名言たるを失はないのであります。